

「マリアとエリサベツ」

ルカの福音書 1:39~56

はじめに

私には元気で愉快的な四人の息子娘たちがいますが、それぞれ个性的で、あまり共通項というものがないのですが、しいて一つ挙げるとすれば、それはダンス「踊り」になるでしょうか。保育所や学校のイベント、課題として半ば強制的にやっていたためということもあるのですが、どの子も小さい頃から事あるごとに踊っていた、というか踊らされてきたという印象があります。今日の箇所にはそのように子が踊る、踊らされるという出来事が記されています。しかもそれはまだ母親の胎内にいる子にそれが起こったというものです。このような話は実際の出来事としてはかなり特異なものですが、そこに秘められた神のご計画は今まで述べられたそれらから逸脱する、異なるものとはなりません。状況を変え内容を変え場所や時間、名前を変えてもなお同じ一つの神のご計画「神の国」を指し示す、という聖書に施されたその巧みな技巧を今日も味わってまいりたいと思います。聖霊の助けがありますように。

1. 二つの胎

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:39 それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。

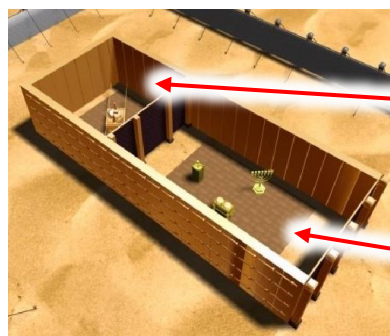
1:40 そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。

1:41 エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。

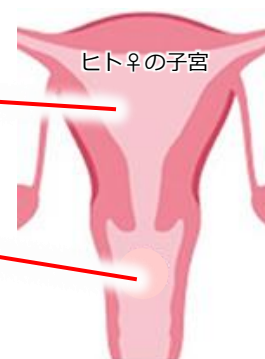
1:42 そして大声で叫んだ。「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。

1:43 私の主の母が私のところに来られるとは、どうしたことでしょう。

マリアとエリサベツ、二人の妊婦がその「胎の実」を互いに祝福し合っています。マリアはエリサベツに「あいさつ」し、エリサベツはマリアを「祝福」していますが、ヘブル語ではどちらも「(人が神に) 祝福される」という意味のパーラフ(פָּרַח)です。見た目にも大変喜ばしい、麗しい光景ですが、これは神のご計画を表す「型」です。その場所は「山地にあるユダの町」とあり、実際の正確な場所は不明ですが、霊的な理解つまり神のご計画の視点で捉えるならば、それはエルサレムです。実際の立地としてもエルサレムは確かにユダの地の山にある町です。そして「ザカリヤの家」とはそのエルサレムの神殿を指しており、「エリサベツ」の「胎」とその「子」は神殿の中核である聖所および至聖所と、そこに仕える祭司の民イスラエルを表しているのです。日本語で女性の胎のことを「子宮」とはよく言ったもので、エルサレムの宮、神殿、およびその原型となったモーセの幕屋の聖所、至聖所とは、そもそもこれを模した造りとなっているのです。



幕屋の聖所と至聖所



子宮においてヒトの精子と卵子が結びついて命が生まれることと、至聖所において神と人が礼拝という交わりを持ち、民全体が祝福されることとは見事に同調しており、そのような目的、ご計画をもって神が人をお造りになったことを表すしるしがここにあります。つまりここに記された二人の妊婦、二つの胎、マリアとエリサベツの出会い、交わりとは二つの神殿の交わり、結びつきを表しているのです。この二つの神殿の一方はエリサベツの胎およびその胎の子がエルサレムの神殿、聖所とそこに仕える祭司の民イスラエルを表していると述べました。ではもう一方のそのエリサベツのもとに来た、マリアとその「胎の実」とは何でしょう、どのような神殿を意味するのでしょうか。この時の彼女の状態は、神の御子の霊をその身に宿した人となっており、それは人の身体を持たれた神の御子、イエシュアを表した「型」であったと言えます。神の御子の霊が人の肉体という神殿に宿られた存在（ヨハネ 2:21）、人の肉体を持たれた神、それがイエシュアです。妊婦のマリアは、人となられたイエシュアご自身を表しているのです。つまりこの二人の妊婦の交わり、祝福を交わすこの出来事には、やがてこの地上に再臨され、エルサレムに帰って来られるイエシュアと、それを喜び迎えるイスラエルの民についての以下の預言が成就することを表しているのです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

23:39 わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。』

神の御子イエシュアを迎えるエルサレム神殿とその民、そこに御子が来られ、宿られる、住まわれる、まさに御子の神殿「子宮」、それがエリサベツとマリア、二人の妊婦の胎とその実に表された神のご計画の「型」です。つまりエリサベツが言った「私の主の母が私のところに来られる」とは、母のようにいのちを生み出す、永遠のいのちを与える存在としてのイエシュアご自身がイスラエルの民のもとに「来られる」こと、すなわちイエシュアの地上再臨の事実を指し示した預言であったのです。

2. 踊る

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:44 あなたのあいさつの声私の耳に入った、ちょうどそのとき、私の胎内で子どもが喜んで躍りました。

1:45 主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。』

エリサベツの胎内で子どもが躍った、というこの出来事もまた「型」です。ここに使われている「踊る、跳ねる」という意味のラーカド(ἄρᾳ)は本来、以下の出来事で使われました。

I 歴代誌【新改訳 2017】

15:27 ダビデは上質の亜麻布の上着をまとっていた。箱を担ぐすべてのレビ人、歌い手たち、歌い手たちの歌唱の導き手ケナンヤも同様であった。ダビデは亜麻布の工ポデを身に着けていた。

15:28 全イスラエルは歓声をあげ、角笛、ラッパ、シンバルを鳴らし、琴と豎琴を響かせて、【主】の契約の箱を運び上げた。

15:29 こうして、【主】の契約の箱はダビデの町に入った。サウルの娘ミカルは窓から見下ろしていたが、ダビデ王が飛び跳ねて喜び踊っているのを見て、心の中で彼を蔑んだ。

これはイスラエルの王ダビデが「契約の箱」と呼ばれる神の臨在の象徴である神の箱を、「ダビデの町」と呼ばれるエルサレムに運び入れる場面です。この時ダビデは「亜麻布の工ポデ」すなわち祭司の衣装を身にまとい、そしてラーカド「飛び跳ねて喜び踊っ」たとあります。エリサベツの胎の子がエルサレム神殿の祭司を表していることを裏付ける事実がここでのダビデにあります。やがてエルサレムの祭司たち、イスラエルの民は、象徴としての神の臨在ではなく、神ご自身であるイエシュアをエルサレムに喜び迎え、力の限りに「飛び跳ねて喜び踊」る日が来るのです。「主によって語られたことは必ず実現する」のです。アーメン！イエシュアはやがてこの地上に、エルサレムに、その宮に来られます。この時のマリアのように、時が来れば立ち上がられ「急いで」来られるのです。

3. はしため

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:46 マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、

1:47 私の霊は私の救い主である神をたたえます。

1:48 この卑しいはしために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。

1:49 力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、

1:50 主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。

前回同様、マリアはここでも自分を指して「はしため」と呼んでいます。ここに使われているアーマー(אָמָרָה)は本来、イスラエル人ではなく異邦人のはしため、女奴隷を指す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

このようにアーマーとは本来、アブラハムの祈りによって癒され、子を産むようになるアビメレクの家すなわち異邦人の「女奴隷たち」を意味する言葉なのです。ですからマリアのこの言葉にはイスラエルの民だけでなく、神の祝福をアブラハムの子孫イスラエルを通して受ける異邦人の存在が表されているのです。神の祝福は本来、アブラハムの子孫であるイスラエルの民に向けられたものですが、この事実を受け入れること、すなわちイスラエルが神の選びの民であることを受け入れるならば、私たち異邦人もまた同じ祝福に与ることができるのです。私たちの神がアブラハム、イサク、ヤコブの神、イスラエルの神であることを今日も覚えましょう。そのために必要なこと、今私たちができること、それは聖書を自分の生活の中に当てはめて理解するのではなく、イスラエルに対する神のご計画の視点で捉え、これを理解することです。このような聖書理解、聖書解釈は、一見私たちから遠くかけ離れたもののように感じてしまいます。しかし神は確かに、ご自分の計画の完成図の中心にイスラエルを選んでおられ、それを実現させるために

私たちのイエス・キリスト、イエシュア・ハマシアハは再びこの地上に来られるのです。私たちの愛する天の父なる神が、愛する主イエシュアが目を留めておられる事実をともに見つめましょう。なぜなら神は私たちを異邦人の「はしため」としてではなく、**イスラエルにつながる異邦人の「はしため」**として目を留めてくださっているからです。これは前回も述べましたが「はしため」奴隷、しもべとは本来、みじめな下等な存在ではありません。主人の財産、宝、価値ある存在、そして主人とともにあり、ともに行く存在なのです。アブラハムはその全財産を持ち、これを引き連れて神が示された地へと入って行きました（創世記 12:5）。同じように神である主イエシュアもまた私たちを伴って「神の国」へと入って行かれるのです。私たちはなんと「**幸いな者**」でしょうか。

4. 忘れずに

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:51 主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。

1:52 権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。

1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。

1:54 主はあわれみを忘れずに、そのしもべイスラエルを助けてくださいました。

1:55 私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」

「アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに」おられる、イスラエルを決してお忘れにならない神、主の御心を覚えましょう。やがて主はイスラエルを全地の祝福の基とするために「**力強いわざ**」を行われます。これまでもそれは現わされてきました。旧約聖書を見れば、そこにはイスラエルを助け出す、救い出す神の「**力強いわざ**」があふれています。しかしやがてもっと大きな、かつてない最大の規模でそれが現わされます。この世の終わり、イエシュアが地上再臨されるその暁には、想像を絶する大いなる出来事が起こるでしょう。それに比べればこれまでのものなどその比ではありません。現在の人の世界、支配体制、あらゆる社会の仕組み、そこから生じるすべての常識が根底から覆されるのです。主の主、王の王イエシュアによって、回復されたイスラエルによってそれが成されます。前々回のメッセージで、エリサベツという名には神のイスラエルに対する「誓い」が、そしてその夫ザカリヤという名にはそれを「覚える」すなわち「**いつまでも忘れず**」におられる神の姿が表されていることを述べましたが、今日の箇所にはそれが秘められた形ではなく、実に大胆に、まさに力強く表されています。

5. 三か月とどまる

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:56 マリアは、三か月ほどエリサベツのもとにとどまって、家に帰った。

一見何の変哲もないこの状況説明もまた、重要なメッセージを持っています。旧約聖書にはこの時のマリアのように、ある場所に「**三か月ほど…とどまって**」その家を祝福したのがあります。それは先ほども取り上げた契約の箱、神の箱です。

サムエル記Ⅱ【新改訳 2017】

6:11 【主】の箱はガテ人オベデ・エドムの家に三か月とどまった。【主】はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された。

6:12 「【主】が神の箱のことで、オベデ・エドムの家と彼に属するすべてのものを祝福された」という知らせがダビデ王にあった。ダビデは行って、喜びをもって神の箱をオベデ・エドムの家からダビデの町へ運び上げた。

ダビデ王によって神の箱がエルサレムへと運ばれるその直前に、それは「オベデ・エドムの家に三か月とどまった」とあり、主は彼の全家を祝福されました。「オベデ・エドム」とは「エドム人のしもべ」つまり「異邦人の奴隷」という意味の名前です。そのような家を主は祝福されたのです。つまりこの記述も先ほどマリアが自分を「はしため」と呼んだ箇所と同様の意味を秘めており、イスラエルによって祝福される異邦人の存在が表されているのです。このように神はイスラエルだけを祝福の対象としてお選びになったのではなく、イスラエルにつながるすべての異邦人がその対象であることを繰り返し強調しておられるのです。イスラエルは私たち異邦人が神の祝福に与るための、唯一無二の祝福の基なのです。

ちなみにこの神の箱とオベデ・エドムの話には、ある神のご計画が表されています。それは神の箱が指し示すその本体、真の神の箱である神の御子イエシュアはエルサレムとイスラエルの民に受け入れられるその前に、まず異邦人のうちに受け入れられる、というものです。実際に今日、イエシュアを神の御子メシアとして受け入れているのは私たち異邦人の教会です。しかしダビデが後にオベデ・エドムの家から神の箱をエルサレムに運び上げたように、イエシュアは全イスラエルに受け入れられ、エルサレムにおいて王とされます。神のご計画の完了、そのゴールはあくまでもイスラエルにあり、その目的地はエルサレムにあるのです。

6. かけがえのない存在

ところで、この空知太栄光キリスト教会の主任牧師は、ご存じの通り銘形秀則先生ですが、たとえばもし、今日先生がその職を辞されて、次に私が主任牧師になったとします。そこで私が「今日から私が銘形秀則です。」と言ったとしたら、あるいは誰かが私をそう呼んだとしたら、みなさんはどう思われますか？ やがて来る「神の国」において、主が私を「我がしもべ銘形秀則よ。」と果たしてお呼になるのでしょうか？ おかしな話です、あり得ません。私は私、神田満であり、銘形先生は銘形先生です。しかし今日、実に多くの教会において、これとほとんど同じことが教えられているのです。それはこうです。「イスラエルは滅びました。今は教会がイスラエルでありアブラハムの子孫です」と。しかもイスラエルという国が実在し、ユダヤ人という民族が滅びることなく、今も確かに生きているのにもかかわらず、平然とそう言うのです。イスラエルに対する神の選び、唯一性、聖別されたその存在を完全に無視するその一方で、教会に集まってくる人々に対しては「あなたはかけがえのない存在、神に選ばれた特別な、神に愛された人です。」と教えるのです。この思想、聖書解釈はあまりにも歪んでいます。神のイスラエルに対する選びが終わった、無効になったとするなら、教会に対する選び、私たちに対する選びも、やがて終わり、無効になって、他の誰かに取って代わられる可能性が出てきます。もしそうなら、イスラエルは、私たちは一体どうなるのでしょうか。そのようなことは絶対にあり得ません。こう記されているとおりです。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

11:26 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。

11:27 これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。

11:28 彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。

11:29 神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。

神のイスラエルに対する選び「賜物と召命」が決して取り消されるものでないならば、そのイスラエルによって祝福される私たちの存在もまた盤石、安泰、確実なものとなります。このようにイスラエルに対する神の救いを否定すれば、私たち自身の救いもまた危うくなるという解釈になってしまうことをぜひ覚えておいてください。ですから神の目には、イスラエルも、イスラエルによって祝福される私たち異邦人も、どちらも選ばれた、かけがえのない存在なのです。

昨年、妻が直腸癌と診断され、癌の中でも致死率の高いこの病気を前に、妻の早すぎる死が一瞬頭をよぎりました。幸い手術は成功し、快方へと向かっていますが、妻の存在のかけがえのなさを覚えさせられる、痛感する時となりました。そして主は地の基の据えられる前からそのような思いを、誰よりも熱い眼差しをもってイスラエルを、そして私たちを見つめておられる、御心にとめておられるのだと思わされました。私は毎回「神のご計画」という言葉を何度も使いますが、どうかこの言葉をどこかの組織や団体の働きとしてのそれと同じようなイメージで捉えないでいただきたいのです。**神のご計画とは、神がお選びになったかけがえのない者たちへ熱い思いを形に表す愛の現れ、言葉や口先ではない愛の行為、その実践なのです。**その究極の形、究極の現れが、滅びを免れさせること、すなわち「救う」ことにあります。それはつまり大前提として滅びがあることを意味しています。滅びがなければ救うという行為が意味を成さないからです。またその滅びが規模の小さいものであれば、そこからの救いも同じく小さな価値しかないこととなります。神は滅びを、とてつもなく大いなる滅びを定め、そこから救い出だすことでイスラエルに対する、私たちに対する思いの強さを、愛の大きさ、その存在のかけがえのなさを表そうとしておられるのです。やがて私たちはそれを、イスラエルとともにそれを目にするることとなります。名実ともに「神の救い」である御子イエシュアによって。これからもともにその日を待ち望んでまいりましょう。